

東北で初の開催へ

6月15日に国際開発学会

研究者ら数百人が参加
市民向けプログラムも

陸前高田

陸前高田市米崎町の交流・研究施設「陸前高田グローバルキャンパス」(旧米崎中)で6月15日(土)、「国際開発学会」の春季大会が開かれる。国際開発を専門とする全国の研究者、大学院生ら数百人が一堂に会する場として30年の歴史を誇る同学会が、大学がない地域で大会を開くのは極めて異例で、東北地方では初めてとなる。今回は研究発表が行われるだけでなく、参加した学会員に対して東日本大震災の被災地の現状を発信する機会にもする。同14日(金)には市民も学べる前夜祭イベントが開かれ、地元の高校生がビジネスプランを発表するなど、地域住民も当事者としてかかわれるよう工夫される。



陸前高田グローバルキャンパスで6月に「国際開発学会」春季大会が開かれる

国際開発学会は、経済学、経営学、政治学、社会学、文化人類学、農学、工学、医学など、従来ならばそれぞれの分野で発展させてきた開発問題に関する知識、経験体系を集約し、横断的に政策研究を行うため平成2年に発足。活動を通じて、開発研究と開発協力に従事する人材の養成を目指しており、会員は1600人を超える。

20回目を迎える今大会は、「被災地のへいま」から開発を問う」と題して開催。学会創設30周年を記念するとともに、被災地から新たな国際開発のあり方を考える特別な大会と位置付けられる。

陸前高田市が会場に選ば

れたのは、大会組織委員長である東京大学東洋文化研究所の佐藤仁教授が、震災後に日米の学生を引率して何度か同市へ通っていたことがきっかけ。同学会長である山形辰史教授(立命館アジア太平洋大学)が本県出身だったこともあり、学会をあげて今回の企画を後押ししているという。

佐藤教授は「過去の大会では会員数が多い大学が開催校を引き受けてきたが、会員が少なかったり、大学自体がない地域での開催が難しいという現状の運営方法を見直すうえでも、被災地を会場にしたいと思うようになった」と説明する。

さらに、「国際開発学会は主に途上国を対象にしているが、個人的には日本国内に今ある問題についても」と議論すべきと考えていた。できるだけ多くの会員に被災地の現状を見てほしいという思いもある」とし、大会翌日には同市の一般社団法人マルゴト陸前高田によるスタディツアーも

盛り込んだ。

高田町の市コミュニティホールで開かれる前夜祭では、県立高田高生によるビジネスプランの発表のほか、「見てびっくり、世界の国と街」と銘打ち、民族衣装を身に着けた学会員が世界の写真を交えながらその知られざる世界を紹介するなど、市民が楽しめる催しを計画する。

また、イベントに先立ち、会員たちが同校生を対象にSDGs(エスディージーズ、国連全加盟国が採択した持続可能な開発目標)にまつわる講義を行うなど、次代を担う若者や地域側にとっても実り多い場にした考えだ。

15日の本大会では、震災復興に関する多くのセッションに加え、戸羽太市長とともに「陸前高田とアジアをつなぐ復興経験」という共通論題による討論会も開催。市民も無料で参加できることから、佐藤教授は「地元の皆さんに開かれた場として、一つのハイライトにしたい」とし、気軽な来場を呼びかける。

春季大会に関するプログラムなどの詳細情報は、国際開発学会「第20回春季大会ウェブサイト」(<https://teamrikutaka2019.wixsite.com/rikutaka2019>)でも確認できる。